

小指の花びら



小指の花びら 1

小指の花びら

体の中で一番好きなところは小指。

私はそこに赤いマニキュアを塗るだけで女の子になることができる。

それは幼い頃に流行ったおまじないに似ていた。

祈りをこめてそれを行えば願いがかなうというおまじないだ。

私は大人になってもそれがやめられない。

だってやめてしまえばきっとそれは叶わなくなってしまうだろうから。

赤紫色の小瓶をひねる。その作業はすでに儀式。たっぷりと赤がのった筆で爪を撫でる。

硬い皮膚を通して感じる冷たさが恍惚を呼んだ。

けれど私を一番うっとりさせるのは輝く赤い爪に口づけをするときだ。

ある意味では、私のおまじないは成功したのかもしれない。

私はもう誰からも男と呼ばれる事はなくなった。女として呼吸し、女として扱われることができた。

ただし、それは女装バーで働くわずかな時間に限っての話だ。

夜が終われば化粧を落とし、服を着替え、爪の色も消してしまう。

そして私は中性的なただの男として写真館のアルバイトへ行き、再び夜になるまで一生懸命働くのだ。

私は神戸で生まれ育った。

街も人も好きだったけれど、男としての人生を捨てるつもりで家を飛び出したのでもう戻るつもりはない。大学をやめて、親にろくな説明もしないまま、しかしある程度の計画性を持って新宿の女装バーで働き始めた。

そこに一年間ほどいたのだけれど、ママがお給料を出し渋るようになったのですぐに辞めた。

この世界では色々と厳しい事があるだろうと覚悟していた私は、傍らでやっていた写真館のアルバイトでなんとか生計を立て、そして女装バー「REM」と出会った。

「あの、レムに行きたいんですけど」

受話器越しに聞こえるのは女を真似た男の声。

もともと低い声を無理やり高くしているためか、下手な演技をしているようにしか思えない。

でもそうしたくなる気持ちや、そうしなければならぬのではないかという気遣いはよく分かった。

かつて私もそのようにして電話をかけたことがあるからだ。

私は思いつめたように話す彼女たちに対して、できる限りやさしく、冷たくなならないように話しかけるよう心がけている。

あと、関西弁のアクセントも出さないように。

「ありがとうございます。レムに来られるのは初めてですか？」

半年前に私が電話した時には、このお店のママである綾姉が同じ言葉で聞いてくれた。

丁寧な言葉で、来店の日と待ち合わせの場所、そして私の女の子としての名前を聞かれたのだ。

私は女でいる時にはミキと名乗っている。

本名が斉藤三紀男なので、「男」を取っているだけの単純な名前だ。

それでも女の子の名前を持つというのは大事なことだと思う。

私は自分自身にミキと名付けたとき、まるで女としての自分に命が与えられたような気がしたんだもの。

電話の相手は「香里」と名乗った。

彼女がどういういきさつでその名前を持ったのかは分からないけれど、そこには女としての時間を過ごしたいという意思がある。

たとえそれが限られた時間であったとしても、そんなことは私たちには関係ない。
一時間でも一生分。それくらいの気持ちでなくちゃこの世界は楽しめない。

受話器を置いた私はほっとした。

電話で喋る事にはだいぶ慣れてきたものの、こんなまともな電話は滅多にかかってくるものじゃなかったからだ。

ほとんどの電話は意味のない冷やかし、とりわけ風俗と勘違いした問い合わせばかりで、そっちの対応に関してはかなり上手くなったと思っている。

しかし綾姉に言わせると「なっちゃいない」らしい。

私は綾姉がお客さん以外からの電話を取ったところを見たことがない。

彼女が取る電話は、すべてお客さんからかかってきたように見えてしまうからだ。

綾姉こと藤崎綾は四谷に女装バーを開いて五年になる。

小さな小さなマンションのワンフロアをまるごと店舗用にしているため、そこいらのスナックよりは高級感があった。

しかしそのせいで不便なことが多いのも事実だ。

というのも私がここに住んでいるから余計にそう思うのである。

「ねえミキ、あなたがここに住んだら家賃浮くんじゃない？」

なんて甘い言葉をかけてくれた綾姉だけど、それは私のためという訳ではなく、単に彼女が男と同棲を始めたからここに住む必要がなくなっただけなのだ。

掃除洗濯その他諸々、面倒な家事全般(お店の料理に至るまで!)は全て私がやること。

この条件の上にお金まで取られるなら考え直そうかと思ったけど、今のところは家賃の請求が来ていないので綾姉の思うままになっている。

ちなみに条件の中には「綾姉が男に捨てられたら一ヶ月以内にこの部屋を出て行くこと」というのも含まれているが、これに関しては初めから守るつもりなんてない。

私はお店の手帳にメモを残してから作りかけのケチャップライスに火を入れた。

中華鍋が音を立てて、おいしいにおいがキッチンに広がる。

オーダーはオムライス。いざ玉子を焼こうかというところでリビングから綾姉が戻ってきた。

そして置いてある手帳に目をやった。

「香里ちゃん、ね。どんな子？」

綾姉は私が一番慎重な作業にかかっているとわかっていながら話しかけてくるような人だ。

私もそれに慣れているので、会話を続けながらオムライスの仕上げにかかった。

「普通の子。ちょっと我が強い感じはしたけど、電話だからだと思う。地声は低い方かな」

人を表現する言葉は多ければ多いほどいい。

綾姉に何度もそう言われ続けているけれど、いまだに「普通」という言葉をよく使ってしまう。

でも、ありきたりなものを他にどう表現すればいいのか私にはわからない。

お皿にのせたオムライスの形を整えてから私は愕然とした。

さっきまでおいしそうに見えていたのに、盛り付けた瞬間に普通のオムライスになってしまった。

何が悪かったのだろう、と考えながらそれを見ていると、綾姉もじっとそれを見ながら、言った。

「このオムライスは、焼けた卵とバターのいい香りがして、ほかほかの湯気が出ていて、とってもおいしそ

うよ」

そして、さっとお皿を取り上げてリビングへ歩いていく。

私はその後姿を目で追う事しかできなかった。

綾姉の背中幅広い。

ウィッグや洋服やシリコンパッドでごまかそうとしたって、それを隠すことはできない。

私は自分の胸に手を当てた。彼女の胸と同じものが私の胸にもついている。

その胸を通してでも心臓の音は感じられるのよ、と教えてくれたのは綾姉だ。

そう言われると作り物の胸が自分の体の一部になったような気がして、嬉しくなる。

そっと撫でるとその感覚すらわかるような気がしてくる。

そんなことを教えてくれる人は今まで一人もいなかった。

私に女装のいろはを教えてくれた新宿のママは、きれいになること、人気者になることを女装の目的としていた。

彼女の言うとおりにするとそれなりのお金を稼ぐことが出来たけれど、どういうわけか私が稼げば稼ぐほど、彼女は私に対して冷たくなっていった。

私は彼女に気を使って着飾ることをやめた。

そしてお店が傾き、お給料が貰えなくなった。

この世界は表向きには能天気な人間の集まりに見える。

しかしその奥はとても暗く、どろどろしたものが立ち込めていて息が詰まる。

そこにいる誰にだって赤い爪にうっとりとすることはあったはずだ。

けれど彼女たちはそれを忘れて掴むことの出来ない何かに執着し、支配されてしまう。

それらは美貌、金銭、愛欲など様々な名前を持っていたが、ひとまとめにすれば嫉妬でしかなかった。

美しいものは醜くなり、もともと醜かったものは見ていられなくなる。

彼女たちは知覚することの出来ない腐臭をまとって生きているようだった。

レムにそのにおいが無いとは言い切れない。

けれど私たちは、まだそのにおいを感じることが出来ている。

「ミキちゃんってお料理上手ねえ」

「ありがと。ひとみちゃん、口にケチャップついてるよ」

この店の常連であるひとみちゃんは、口元をナプキンで拭ってから自分が口紅をしていたことを思い出す、おまぬけな子だ。

「あっ、いっけな一い」なんて可愛らしく取繕って自分のキャラクターを確立させ、女装している時の自分を楽しんでいる。

化粧をしても、しなくても、四十代であることがわかってしまう子なんだけれど、彼女の演じる明るさは私たちの同情を誘わない。

どれだけ老けていようと、青髭が目立っていようと、彼女が二十歳と言ったらこの店では二十歳なのである。

ブスだなあとは言っていないけど、おっさんだよなあと言っではいけない。

それがひとみちゃんのガイドライン。

彼女の崩れたメイクを直すのは綾姉の仕事だ。

テーブルに置いてあるポーチから道具を取り出し、ささっと色を作ってから唇に塗っていく。

ひとみちゃんは綾姉にお化粧をしてもらうのが大好きなので、決して自分でやろうとはしない。

「ま、仕事だからね。いくらでもやってあげるわよ」と綾姉は言うけれど、その都度メイク直しの料金が伝

票に書き足されていることを私は知っている。

そしてひとみちゃんもそれに気付いている。

彼女は綾姉にかまってもらうためにはより多くのお金が必要なことをよくわかっていた。

「ひとみちゃんはもうちょっとおしとやかにならなきゃだめよ」

「トーコみたいに？」

綾姉はトーコの方を見てからうなだれた。

「うーん。トーコが二人いるっていののは、大変かもしれないわ」

ベイリースミルクを飲んでいるトーコは線の細い可憐な子。

ぎりぎりですぐの彼女は三十路前を自称する綾姉と同年……ということになっている。

ひとみちゃんのように自分のキャラクターを作ることにはしないけど、女装することによってスキンシップを取りたがるようになる甘えん坊だ。

今も私の隣に座って、擦り寄ってきて、ちらちらと顔を覗き込んでくる。

頭を撫でてあげると気持ちよさそうに目を細めて、とろんとなる。

彼女が自分から人の体に触るようなことは絶対にしない。

私には彼女がそれを必死に我慢しているように見える。

トーコは会話の流れをまったく気にせずに私をじっと見ていた。それはもっと触ってほしいという意味表示だ。

この要求に安易に答えると大変なことになるので、私は視線を少し外へずらした。

すると今度はずらした視線の先にフレームインして来る。

ああもう。私は仕方なく彼女の方へ向き直った。

トーコの女装は巧い。前髪を丁寧に作っているためか、男っぽい部分がうまく隠れている。

上から見下ろすこのアングルでは、誰もが彼女を可愛らしい女の子だと思うだろう。

この子を狙う男たちの気持ちも、まあわかる。

レムは基本的に女装を楽しむためのバーだ。

しかし女装した子を目当てにしたお客さんも来る。

一概に言うことは出来ないけれど、彼らの趣向は綾姉系か、トーコ系かに分かれる。

会話を楽しむか、スキンシップを楽しむか、ということだ。性的な行為はレムの許容範囲外となっている。

ただし、トーコみたいな子はそういうお客さんも大歓迎なところがあるため、女装した子と男性のお客さんが暴走しないように目を光らせるのも私たちの仕事だった。

ひとみちゃんやトーコはこの店で好きなお酒を飲み、好きなだけ女として振舞っている。

それが女装バーの楽しみ方だということをよく心得ているようだった。

しかし初めて来るお客さんの中には、ここをコスプレする場所と勘違いしたり、一夜限りの出会いの場所として利用しようとする人もいる。

お店の楽しみ方は人それぞれだろう。

けれど世界中の全てのバーがそうであるように、この店にもスタイルというものがある。

それを崩すことは店をつぶすことと同じだ。

綾姉は一月に一度は訪れる勘違いした人を、時には口で、時には腕力で追い返す。

私もいずれはそういうことをさせられるのかと思うとぞっとするけど、この店のためなら戦ってもいいと思っている。

たぶん戦力にはならないと思うけど。

「トーコ、その服かわいいね。どこで買ったの？」

私がそう聞くと、トーコはしどろもどろしながら「まるい」と呟いた。

「まるって、新宿のマルイ？」

「うそ、トーコあんなとこで買うの？」

「度胸あるわねえ」

みんなの口調に驚いたのか、トーコは泣きそうな顔をして「もう行かない」なんて言い出してしまふ。私は慌てて彼女をフォローした。

「そんなこと言わないで。普通に買える店があるってすごいことだよ」

しかし彼女の表情はますます暗くなるばかりだ。

下を向いて「違うの」と言ってから一言も喋らなくなってしまった。

トーコはちょっと落ち込むとすぐこうなる。

きっと誰かの言葉を待っているんだろう。

こんな時にいつも「何かあったの？」と聞いてくれるひとみちゃんが、今日はなぜか何も聞こうとしない。私は自分が同じように聞くのはなんだかわざとらしい気がして、他の言葉を探していた。

出来れば、何かあったであろうその先に言うべき言葉を言いたかったのだけれど、様々な推測が浮かんでは消え、どれも不適當に思えてしまふ。

たとえわざとらしくても普通に聞ける潔さがあればいいのになあ、と思いながらも、私の頭は同じところをぐるぐる回っている。

沈黙を短いうちに終わらせたのは綾姉だった。

「まだまだってことよ。あんたも、あんたの周りの世界もね」

そう言ってからトーコの頭に手を置き、

「大丈夫。トーコはもっとかわいくなれるよ。そしたら私と一緒にお店を回ろう」

と言った。

タイミング悪く電話が鳴り、私はそれに吸い込まれるようにキッチンへ歩いていく。

そして受話器を取る瞬間、安堵した自分に気付いた。

私はあの空気から逃げ出そうとしていたのだ。私はそのことにショックを受けた。

でもだからといってどうしようもない。できることといえば、自意識を呪うことくらいだ。

電話は「香里」さんからだった。今、駅に着いたところらしい。

私はコンビニにまでの道を説明して、わからなければまた店に電話してほしいと告げた。

駅からコンビニへ行くより、ここからコンビニへ行く方が遠い。

香里さんを待たせるわけにはいかないので、急いで自分の部屋へコートと帽子を取りに行った。

「あれ、ミキちゃんどっかいくの？」

外へ出る準備をしている私に代わって綾姉が答えてくれる。

「男に会いに行くのよ」

違う。いや、違うけど。

リビングではひとみちゃんが何か騒いでいたが、私は気付かないふりをして足早にレムから脱出した。香里さんを迎えに行っている間にどんな既成事実が出来上がるかは、帰ってからの楽しみだ。

外へ出ると冬を思わせる冷たい空気が体を強張らせた。

でも二月の冷たさとしてはいささか物足りないような気がする。

今年は暖冬らしいけど、去年もそんなことを言っていなかったっけ？

夏が長いとか、秋が短いとか、最近はカレンダーを見ながら季節を確認することが多い。

連鎖的に環境やらエコやらが頭をめぐったあと、明日は缶・びん・ペットボトルの日だ、と思い出した。

コンビニの、外で待っていてください。と言ったのはお客さんを特定しやすくするためだ。

思ったとおりコンビニのゴミ箱の側に男の人が一人で立っている。きっとあの人が香里さんだろう。

私が近づくと彼女は軽く手を上げた。

「ども、帽子でわかったよ」

私の頭を指差す香里さん。私は白い毛糸の帽子を被っていた。

さっきの電話のときに自分の目印として伝えておいたのだ。

たとえ携帯電話があると言っても、電池が切れればただのおもちゃでしかない。

こういった古臭いながらも確実なやり方は綾姉の主義である。

冷たい風が吹いたのを合図にして、私たちは歩き出した。

「帽子がなかったら、わかりませんでしたか？」

「うん。わからなかった。普通の女の子みたいだ。背が低いからかな」

ぐさりと来る言葉を聞いて私は香里さんの方を見た。

確かに私の背は少し低いかもしれないけど、どちらかというこの人の背が高いだけなのだ。

綾姉より高く見えるということは、一七五センチ以上はあるのだろう。

しかし体は細くて頼りなく、スポーツなどをやっているようには見えなかった。

店に置いてある服で彼女が着られそうなものをいくつか考えてみるものの、巧いコーディネートは浮かびそうにない。

「ミキさん、だったよね。その髪は地毛なの？」

「このへんまでは地毛で、ここからがウィッグです。わかります？」

私は少し色を抜いた地毛を男で言うところのミディアムの長さに、そこから色を合わせたウィッグで背中までのロングにしている。

香里さんは髪ではなく首筋を見るような感じでぐっと顔を近づけて来たので、私は反射的に身を引いた。怖いと言うよりは幼い感じがする。

見た目目で三十代くらいかと思っていたけれど、中身はそこまで追いついていないのかもしれない。

「そのコート抜群にかわいいなあ。いつもどんなところで買ってんの？」

「これは知り合いの店で。でも服はほとんど通販で買ってますよ」

「なんで？ こわいから？」

どうも香里さんは一言余計に言ってしまう性格らしい。

「まあ、怖いと言えば怖いですね」

「うそだー。ミキさんなら絶対ばれないって」

香里さんは電話の時は大人しそうだったのに、今はナンパに目覚めた大学生みたいに積極的に話しかけてきた。

それはたぶんこの人が男として話しているからだろうと思う。

まだレムの外だからそうしているのか、それともこの人は男としてお店に来るつもりなのか。

でもそれなら電話で女の子の名前を言う必要はなかったはずだ。

私はその事を聞いてみた。

「香里さんは女の子としてレムに来るんですよね？」

「うん。家で女装してみたらちょっと気に入っちゃってさ。それで本場の女装を体験してみたくなっちゃったってわけ。

レムのことはミクシィ友達から聞いたんだよ。いい店だって」

「そうなんですか」

あまりにもカジュアルな理由に拍子抜けしてしまう。

私が働いていた新宿の女装バーでは、女の性への憧れが女装の理由になる場合がほとんどだった。

もちろん私もそうである。

しかし最近では性同一性障害を自称しない女装者も多くなってきたようだ。

それがいい事なのか悪い事なのかは微妙なところだと思う。

ただ、そういった感覚がネットコミュニティを通して世間に広がっているのは確かなんだろう。

私はさっきお店で見たトーコの顔を思い出した。

彼女がいくらかわいくなっても、社会は彼女を女として見てくれない。

たとえマルイの店員がトーコよりブスであっても、平気で「気持ち悪い」と罵られてしまう。それが今の現実。

私は同性愛や性同一性障害に対して理解のあるタイが羨ましい。

辛くて美味しいトムヤンクンと一緒に、そういった価値観も日本に浸透してくれればいいのになと思う。

「ミキさんはホルモン飲んでるよね？」

価値観は浸透しなくても、そういった知識は浸透しているらしい。

香里さんがまさか焼肉の話をしているとも思えないし……。

私はため息をついてから彼女をたしなめようとして、やめた。

私の今の立場では彼女の不当性をうまく説明できないような気がしたからだ。

「飲んでますよ。プレマリンを一日三錠」

「おっばいおっきくなった？」

「……経口薬じゃああまり大きくなりませんよ」

「そっかあ、やっぱホルモンじゃフジコみたいにはなれないんだね」

「フジコ？」

「そう、峰不二子」

私は思わず吹き出してしまう。

それと同時に口の端がぐいーと上がっていくのがわかった。

「あ、笑った」

「だって……なんでルパン三世なんですか？」

「そりゃ、好きだから……っつーかミキさんこそ、さっきなんか発音変だったよ」

そんなまさか。

そう思って自分が言った言葉を思い出し、ばっちり関西弁アクセントでつつこんでいたことに気付かされた。

私が標準語を少し聞くだけで「うわ、弱そうやなあ」と感じるように、香里さんも何か違和感を感じたんだろう。

「私、神戸出身なんです」

「へえ、神戸……って言われてもよく知らないんだけどね。教えてよ」

一度笑ってリラックスしたおかげか、やっと香里さんの性格が見えてきたような気がした。

私が思うところでは、自分に素直で我慢が苦手。

言いたい事は言い、聞きたい事は聞く。悪気はないんだろうけどきつとデリカシーもない。

同性の友達に慕われるタイプなんじゃないだろうか。

これだけ特徴が揃えば、なるほど「普通」とは言い難い。

夜の間は私は女。けれど好きなときに男の顔を見せる事だって出来る。

これはただの女には真似する事のできない私だけの特権だ。

私は夜の風を体に受けながら「こんなんじゃないねん」と呟いた。

驚いている香里さんを見無視して、私の心は空を飛ぶ。

J R三ノ宮駅からフラワーロードを通して旧居留地へ。

国道まで出ると強い風が吹いているけれど、それは決して車のせいじゃない。

歩道橋を渡ってしばらく歩けば海が見えてくる。そして振り返れば山が見える。

「それが神戸という街ですよ」と説明すると、香里さんは怪訝な顔をして私に言った。

「神戸って、田舎なんだ？」

私はまた笑ってしまった。

—小指の花びら【2】に続きます